
【2011年】魔術師さんの学園生活なう【書き納め作品】

朽葉 周

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【2011年】魔術師さんの学園生活なう【書き納め作品】

【Nコード】

N0295BA

【作者名】

朽葉 周

【あらすじ】

2011年の書き納めとして、何か書きたいなあ、と思って書いた。執筆期限は30日の深夜から31日の年越しまで。——なんとか、ガキ使までに間に合った。

魔術師のアインは、所謂学園都市によりその存在を保つなんていうテンプレな設定の王国の設立する学園に通う2回生である。趣味としてサバイバルなんかもこなすレンジャー系魔術師であるアインだが、そんなアインにも問題が一つ。友達が居ない。その事に気付か

ぬというか自覚の無い本人は、それでも日々を静かに学びに費やす。
そんなアインの、日常の転換期。

序

序

「フレッシュテさん、あなたに決闘を申し込みますわ!!」

何時もの日常、少し様子が変わったのは、目の前に立つ金髪の少女のそんな一言からだった。

「——何故？」

思わず首を傾げる。何せ此方に見れば、見聞きも知らない赤の他人に突然決闘を吹っかけられたのだ。夜の歓楽街で酔っ払いにけんかを売られたようなものだ。

「決まっていますわ!!」 ロイ様の周りに纏わりつくあなたが、いい加減目障りですよ!!」

苛烈に、声高らかに歌い上げる様に言い放つ金髪の少女。まるで自分の行いこそが絶対の正義であると妄信する狂信者のようなその様思わず逃げ腰になりながらも、何とかその位置に踏みとどまる。

「ロイって…… またあいつか」

「あなた風情がロイ様を呼び捨てにするなんて!! ——まあ、いいですわ。私からの要求は一つ。私が勝利した場合、今後あなたはロイ様に近付かない事を誓いなさい」

「……」

余りにも一方的な宣言に、口を挟む事もできずに、結局如何した物かと口をつぐむ。

いや、別にロイ——ロイ・F・レビンこと我が幼馴染と距離を置く、という行為自体、此方に見ればなんらデメリットも無いので、特に拒絶する理由もない。

と言つかそもそも、少し前にあったあの事件さえなければ、幼馴染に顔を合わせることもなく、残りの学生生活を静かに過していただ

ろくに。

「では、くれぐれもお逃げになりませんように!!」

そう言ってツカツカと音を立てて歩き去っていく金髪ロール。いや、決闘するにしても詳しい日程とかルールとか、というか此方の意見は欠片も聞かないのか。

なんだあの騒がしいのはと、思わず小さく溜息を零す。「大変だね」なんて少し同情してくれるクラスメイトの言葉が、これほど温かいものだというのは極最近知ったことだったり。

私、アイン・フレッシュテは、王立ヴァルセラ学園、基礎選択コースに所属する2年生だ。

このヴァルセル王国に存在する最大の学園であり、同時にヴァルセラ王国最大の存在意義とも言われるヴァルセル学園。

この中へ大国の群立する南ウルガリ地方の中、その中央に位置するこの小国ヴァルセル王国がいまだに現存するその理由。

要するにこの国は、“知”を司り、最低限以上の武力を持たず、また全てに等しく共用を授ける事で周辺国家に対して不可侵の存在と自らを位置づけたのだ。

このなんとも危うい均衡の上に成り立つこの学園王国。何時崩壊してもおかしくないのだが、然しこの国、案外巧く立ち回る。まあ、私がここに居る間に潰れられても困るのだが。

とはいえ、ヴァルセラ学園の出であるという事は、出身生に一種のブランド価値を与える。国ぐるみで学業に力を入れているのだから、他国のそれがある程度以上上回っている。

そのブランド価値というのが、今現在も有効であるという事実こそ、ヴァルセラ学園の優秀性を示す物か。

さて、事の起こりはつい半月ほど前まで遡る。

その日、新学期が始まると、クラス編成が変わり新たなクラスに所属する事となる春。自らの所属する事になるクラスを知る為に、学年別の掲示板まで足を運んだ時のことだ。

ガヤガヤと自らのクラスを語り合う同級生達。その中に、一際目立つ一段を見つけたのは。

「何アレ」

思わず、そんな言葉が洩れた。

遠目に見える掲示板の前。其処に、赤青黄色、ピンクに緑と色取り取りの頭が目立つ集団。

いや、まあカラフルな頭髮なんていうものは、様々な国からの留学生が溢れるこの学園では——まあ、無くは無い。

目立っているのは、その集団の9割が美少女で、残る1割が長身の美男子だ、という点。

「ん？ フレシユテさんアレ知らない？」

と、不意に横から掛かった声に首を向ける。確か、一学年時に同じクラスだった少女だ。

彼女の問いに首を縦に振ると、彼女は少し物珍しそうに此方を見た。——どうせ私は時事ネタに疎いよ。

「アレね、通称ロイハーレムって呼ばれる、私たちと同学年の名物ハーレムなの」

「——名物ハーレム」

また凄まじい。

「何処かの貴族？」

だとすれば、まあ、納得できなくも無い。この学園の入学資格は、現在進行形で罪人ではない、という一点。

故に、大抵誰でも入学できるのだ。それこそ、王様から解放奴隷まで。

自分の世話役のメイド一団を連れ込む貴族も居るのだ。まあ、ハーレムを連れ込む人間がいたとしても——いや、学び舎にハーレムで

「レキユア王国の貴族らしいよ。でも、あのハーレムの面子はもつとすごいんだよ」

そういつて少女の指の先と声を照らし合わせていく。

赤色がフレイムハウト王国伯爵次女

青色がエーテライト皇国公爵三女

黄色がルーンランド王国第八王女

桃色がニヤンダルシア共和国リリム商会次女

緑色がティーチア王国子爵長女

なんともまあ。この国の周囲を囲む大体の国の貴族成り有力者成りの娘が勢ぞろいとか。

「なんでもね、皆あのロイ様に助けられたり命を救われたりで懸想しちゃったらしくて、あの面々で誰が彼を落とせるか、って競争になってるみたい」

賭けにもなってるんだよー、と少女。

なんともまあ。然し聞く限り、彼女達の話はそこそこに有名な物らしい。だとすれば、一年間同じ学年で学んでいた私が気付かなかったのって――。

「ソレは――ほら、ね？」

言いづらそうに苦笑する少女。ちくせう。どうせ私は流行知らず。

「それに、あの子達は基本的に武芸の授業を選択してたし、サバイバルとか上級魔法やってたフレッシュテさんとは選択科目が違うから」
そういう少女。うん。慰めに感謝。

話を聞いているうちに、どうやらあのハーレム一団、私と同じクラスになるらしい。

「ご愁傷様」と苦笑する少女に、此方も小さく苦笑を返した。

「アインでいい」

「――！！」

フレッシュテって名前、発音しにくいし、この国だと若干韻がおかしくなるからなあ。

で、その後少女――マロンと名前を交換して、またその内にとその

場を離れる事になった。

——そういえばの話、この学校に入って初めて名前を交換したなあ。自分ってもしかして、友達居ないのか？　なんていうことに今さら愕然としつつ、ついでにさっき見た美形青年の顔を思い出す。

何か、何処か引つかかるのだ、あの青年。……もしかして、顔見知りかな？

気のせいかな、などと考えて、結局思考を放棄する。それがフラグだったと知るまで、後数日。

この学園の基本的なシステムは、自分達のクラスで行われる一般教養に加え、其々の目的とする選択教科を自由に選択できる、というシステムが存在する。

この選択科目コースは、他の専門科目のコースに比べ、自由度が高いという点が利点とされている。

私としても、サバイバル系技術と魔術のスキルアップを目指しているのだが、一般的な学校で考えれば魔術師がサバイバル技術を伸ばす、なんていうのはありえない。

魔術師と言うのは普通学者肌。要するに運動音痴な連中が多いのだ。私みたいなアウトドア系の魔術師はかなりレアな分類に成る。

で、何が言いたいかと言うと、例えばあのハーレムと同じクラスに属する事になったとしても、基本的に選択科目が違うのであれば、此方があのハーレムに関わる事はないだろうと。そう、考えていたのだが。

それが誤りだったと知ったのは、精霊魔術の授業。

精霊魔術は魔術の中でも最も簡単且つ危険な魔術とされている。何せ手順を略してしまえば、結局魔力を対価として精霊に現象を祈る、と言うだけのプロセスしかないのだ。

巨大な魔力持ちや何等かの属性の加護持ちだと、感情の高まりに精

霊が呼応し、勝手に暴走状態に入る、というのは珍しい現象ではない。

この精霊魔術というのが、簡単で危険という性質上、教科を選択できるのが最低でも基礎の制御力を身につけた2回生以上からとなっているのだ。

一応精霊魔術も扱えるが、やはり正式に教授を受けておく必要もあると、何気なく取得した精霊魔術。そうして訪れた授業の中で、あのハーレムを見つけたのだ。

厭成程。確かあの面々は殆どが貴族なり有力者だった筈。となれば、精霊の加護持ちの血筋が混じっていてもなんら不思議は無い。

精霊の加護というのは、それだけで一つのブランドだからなあ。

あまり騒動に関わりたくない此方としては、ハーレム一団から距離を置き、何時も通り授業を受けていた。

「ロイ様に気安くつ!!」

ことが起こったのは、精霊魔術の実習授業中。

声に釣られて視線を向ければ、件のハーレム男を中心に、二人の少女が言い争いのような状況になっていた。

ハーレムは如何したのかとその方向を見回すと、——ああ、おろおろしてる。

「どうした？」

とりあえず手近にいた男子生徒を捕まえて、一体何があつたのかと問いかける。

「あ、ああ。どうも、例のレビンが新しい女の子を引っ掛けたみたいなんだが……」

そういつて指差す男子生徒。ハーレムの新規さんか？ にしては、妙に刺々しい空気になっているが。

そう言くと、男子生徒は少し苦笑したような表情で首を振った。

「どうも、後から来たあの金髪は性質が悪いタイプの貴族らしくてね。レビンを自分の男妾にしたいらしいよ」

ソレを聞いて、思わず呆れる。男妾で。

いや、貴族と言う人種は、自分達ならば大抵の事が出来ると妄信している節がある。まあ、事実自らの納める領域の中でならば、自らを咎める物は殆ど無いだろう。

然し、此処はヴァルセル王国。他国の貴族の権力は、その一切が持ち込まれない。その事を理解しないのか、理解できないのか。

男子生徒に礼を述べて、再び自らの魔術の修練に戻る事にする。ああいうのは興味を持つと飛び火してくる。

風の精霊に呼びかけて、手の平の中に小さな風の玉を作るイメージで……。

「危ないっ！——うわあ！！」

そうして、悲鳴が響いた。

また騒ぎかと首を動かして、そうして見えた此方に飛んでくる男の背中。

咄嗟に手に作った風の玉を向けて、精霊にそれを受け止めるように命じた……のだが、どうも減速しきるには圧力が足りない。

咄嗟に脚を踏ん張り、襲い来るであろう衝撃に備えて——。

どんっ！ という衝撃と共に襲いくる衝撃。ソレを何とか往なし堪えて、飛来した背中を地面に下ろす。

「うおっ！？」

どすん、と音を立てて着地——というか落下——するその、男子生徒。って、コイツハーレム君だ。

「…………ロイ様っ！！…………」

まるで狙ったかのように揃う少女たちの声。寧ろ若干怖いなと思いつつ、とりあえず地面に転がるハーレム君に手を差し伸べる。

「あ、ありがとう」

こちらの手を引いて、一息に起き上がるハーレム君。うむ、美形だ。

「ロイ様！」「ご無事ですか！」「怪我はありませんかロイ様！」
以下略。

なにやら雪崩のように押し寄せる美少女ハーレム一団。咄嗟に少年

から身を離し、その少女の一団から距離を置く。

うーん、関わりたくないって考えてる傍から切欠が出来てしまった。此処は一つ、レンジャー系スキルの一つ、隠形を使ってこっそりとこの場を離脱――

「ちよつと其処のあなたっ！！　ロイ様を受け止めずに地面に落とすなど、何を考えておいでですのっ！！」

と、そんな折だ。ハーレムと揉めていた件の金髪の少女が此方に口撃を飛ばしてきたのは。

改めて少女の方に向き直る。金髪ロールに巨乳でタカビー。ハーレムの面々に劣らず、まるで狙ったように三拍子揃った美少女だ。

「っ！！　何とかお言いなさいなっ！！」

此方が観察していると、どうもソレを何となくで察したらしい。不快気に声を上げる金髪。

「ちよ、大丈夫、俺は大丈夫だから！！」

如何した物かと、一色触発といった空気の中で悩んでいると、不意にそんな声が上がった。

どうやら起き上がった少年が漸くハーレムの包囲網から抜け出したらしく、此方と金髪の間割り込むと、そういつて少女を宥め、次いでこちらに向き直った。

「キミも、有難う。あの風とあわせて受け止めてくれなかったら、俺も下手すれば怪我――を……？」

「……ロイ様？」

此方の顔をみて黙り込むハーレム君。けれども……うん。やはり、この顔何処かで見た覚えがあるような。

「もしかして……師匠？」

言われて、改めてハーレム君の顔を見る。

師匠、師匠……。師匠とは、何かを弟子に教え伝える人間を指す。私は魔術師だが、未だに魔術の弟子を取った事はない。未だ学生的身なのだからソレも当然なのだが。

然し、ハーレム君の顔には見覚えがある。では、一体何処で……？

「師匠ですよね！ ほら、レキュアの国境北の……！！」

「……ああ、エシェフの」

そこで漸く思い出した。私の祖国ガレリア、その南に位置し、国境を隣接させる小国レキュア。

昔、国のゴタゴタに巻き込まれ、そのゴタゴタから逃げるために一時期レキュアに身を潜めていた時期があったのだ。

その時——そう、確か、精霊魔術を暴走させて、街の子からハブラれて居た子供に、精霊魔術の基礎と、簡単なサバイバル術を教えたような。

「やつぱり先生だ！！」

そういつてにぱつと微笑むハーレム君。さっきまでの凜々しい雰囲気顔の顔に比べて、如何視ても子供の笑顔にしか見えないそれ。

周囲からうわあ、と言う声が聞こえる。コレが噂に聞くニコボか、と。何を言っているのか分らない。

とりあえず、此方に話しかけてこようとするハーレム君を、授業中だからという理由で押し返す。

——ハーレムに睨まれているのは何故だろうか。

破

破

それからというもの、ハーレム君は、よくよく此方に話しかけてくるようになった。

私としては、ハーレム君はその昔少し術を教えただけの知り合いなのだが、何でも彼にとって私はヒーローなのだそうだ。

精霊魔術の暴走で、両親以外の誰からも見放されていたところに、ふらりと現れて精霊魔術の制御を教え、その後ふらりと立ち去って話だけ聞くと、まるで講談の魔法使いのようだが、その事実はいえ、当時お気に入りの木陰の近くに、なにやら爆弾のような子供が居て、その被害を恐れただけ、と言うのが真実なのだけれども。

まあ、言わぬが花か。

嘗ての短い縁。それを切欠に此方に話しかけてくるようになったハーレム君。

まあ私としても過去の知人に顔を合わせる、なんていうのは中々珍しい経験だ。

口下手な此方から話をする、と言うのは余り無かったのだが、向うは定期的に此方に顔を合わせにきては、最近の様子やら細々とした事を話して来るのだ。

——こういう細々とした会話を新鮮に感じるというのは。

内心で薄ら涙をにじませたりしつつ。ハーレム君、改めレビンと日常的に会話をする程度の関係になったのは。

そうして、ことは頭の部分に戻る。

どうもレビン、ハーレムの女の子達との時間を若干削ってまで、此

方に会いにきていたらしい。

いや、駄目だろう。女の子は何に変えても優先するべきだ。

まあ、そういった小言は言いつつも、金髪ちゃんの決闘宣言は既に既定事項になっているらしい。

というのも、この学園は騎士だとか冒険者を育てる学科を有するという関係で、コロシウムでの模擬戦闘が普通に行われていたりする。その関係上、事務書類として手続きを通してしまえば、誰でも決闘なり何なりを行えるのだ。

魔術の予習復習にこのシステムを利用している身では言えた事ではないのだが、何でこんなシステムがあるんだろうか。

試合の日取りは、二日後の放課後という事に成ったらしい。

金髪ちゃんヶ勝利した場合は、レビンから距離を置く事、私が勝利した場合は、金貨10枚を賞金として出す、のだそうだ。なんとも豪気な話である。

とりあえず揉め事の原因となってしまうたことを誤りにきたレビンに出された条件を話した所、「手加減してやって欲しい」なんて頼まれた。

此方が敗北するという可能性は考えないのだろうか。

「師匠が？ 敗北？ ハハッ」

なんだそれは。

で、当日。コロシウムの中央に立つのは、此方と金髪ちゃんの二人。金髪ちゃんの手には、銀色の法装済みの両刃のレイピアが一本。腿、腰、胸をライトアーマーで覆い、左肩には派手な刻印のなされた肩用の盾。

冒険者の装備と言うよりは、何処かの国の貴族の儀礼服のような…

…。いや、本当に儀礼服なのかもしれないが。

対する此方の装備はというと、黒い皮の軽鎧一式と、片手剣バックル付き。因みに黒い理由は闇に忍ぶ為だったり。暗殺者、と言うわ

けではなく、野外戦で不特定多数に認識されない為の措置だ。
決して私の趣味で真っ黒、と言うわけではない。

「あら、臆せずに来ましたのね。見上げた度胸ですわ」

「……」

金髪ちゃんの身体を見るに、身体能力は中の上と言ったところ。肩盾であるところを見ると、魔術を使う可能性もある。

其処まで警戒する必要は無いかもしれないが……。

「最終通告です。あなたがこの場で謝罪し、今後ロイ様に近付かないと約束してくださるのでしたら、この場は穏便に収めて差し上げても宜しくてよ？」

「……」

別に、その条件を飲んでもいいのだ。ただ、この金髪ちゃん、一つでも妥協してしまうと、其処を皮切りに徹底的に攻撃してくるだろうし。

例えば、偶然レビンに近付いたとして、ソレを理由に更なる条件を追加していく、みたいに。

というか、謝罪ってなにさ？

「——く、ダンマリですの。為らば、この私の剣で直々に成敗して差し上げますわ！」

そういつて腰からレイピアを抜き出す少女。

あわせるように、此方も片手剣を鞘から引き抜く。何か魔術で特別に加工したわけではないのだが、只単純に強靱であれと願い打った剣。

「——それでは、双方、互いに正々堂々、杭の内容に戦う事」

——はじめっ……

コロシアムの担当官のそんな掛け声と共に、金髪ちゃんはこちらに向かつて飛び掛ってきたのだった。

金髪ちゃんの攻撃パターンは、ある意味とても単純明快。

突きと斬り。速度重視のソレは、然し所々フェイントも織り込まれ、見事なレイピア捌きといえる。

けれども、だ。

余りにも綺麗過ぎる。巨星曰く「正確な攻撃だ。然しそれ故に攻撃が何処に来るか予想しやすい」と言うやつ。

しかも攻撃が真正面からしか来ないのだから、そのパターンと言うのもある程度限定される。正直、「余裕」というやつだ。

真正面からの刺突三連。其々を真横からの点打で弾く。一つ一つを丁寧に弾く事で、其処から体勢を立て直す際の体力の消費を加速させる。

「くっつ！！ ファイヤーアロー！！」

「サイコシューター——シュート」

剣での攻撃に埒が明かないと焦れたらしく、金髪ちゃんは一度距離をとると、そのままスタイルを魔術による中距離戦へと移行した。

とりあえず此方も無属性の誘導弾を声に出して発動させる。——然し、金髪ちゃんは駄目駄目だなあ。あの距離じゃまだ此方の剣の間合いだ。あえて遊ぶ心算でなければ、簡単に倒せて仕舞う。

まあ、今回はレビンに手加減を依頼されているから、即殺はしないようにするが。

金髪ちゃんの放つ炎の矢。攻撃力と速射性に優れる精霊魔術で、ある程度精霊が誘導もしてくれる上に魔力を籠めれば簡単に速射数を増す事が出来る。

攻撃力の高さから、精霊魔術師ならば絶対に覚えているとまで言われるこの汎用魔術。

ソレに対して此方が用いるのは、演算魔術の誘導弾だ。基本的に才ドを用い、思考制御により魔を御する。

精霊魔術と違い、精霊のバックアップを受けることが出来ず、難易度は数倍跳ね上がる。速射性も攻撃力も精霊魔術に劣るといわれるそれを、然しあえて選択する。

「んなっ!？」

そう、それ。その顔を見たいからこそこの魔術を使うのだ。無属性の魔力の塊。突如として現れたソレが、次々と自らの放った炎の矢を撃ち落していくのだ。それも、自らの魔術ではありえないほどに自由な軌道を描いて。

果たして金髪ちゃんの内心は、どのようなものだったのか……。

サイコシューターは、分類的には心霊魔術。精霊を介さずに魔力を扱う為、実体を持たない、または実体が薄い霊体や魔族に対して、高い攻撃力を持つ。

ホラーハンターやデモンハンターくらいしか愛用しないこの攻撃。

然し、この術にはもう一つ大きな利点がある。

それが、術の完全制御。

ある程度精霊との取り決めにより縛られている精霊魔術は、その性質を大きく変化させる事ができない。

例えばファイヤーアローなら、狙った相手にオートで炎の矢が飛んでいく、と言うだけだ。魔力でその総量を増やす事はできても、途中で突然炎の矢が爆発したりすることは無い。

然し完全制御が可能な心霊魔術は、例えば狙った相手の直前で攻撃をとめることも出来るし、魔力の込め具合でその術単体の強度を高める事も出来る。

精霊魔術に比べて、応用性が高いのだ。……まあ、錬度が上がれば、の話だが。

「い、今のは心霊魔術!? 然しあれほどの誘導性は……」
「……」

まあ、使って長いからねえ。

魔術の錬度は、その運用時間に比例するとされる。何度も何度も使い続けることで、自らが徐々に魔術に適した形に育つのだ、と言う

話らしい。

「っ！！ 為らば撃ち落せないほどに、雨霞の如く喰らいなさいな！！」

その叫びと共に、浮かび上がるようにして現れる炎の矢。数は先ほどのソレに比べて、ざっと三倍。

最初のそれにしても常人の倍近くあったのだから、少なくとも現状、彼女の最大出力は、ざっと常人の六倍近いという事に成る。

うん、アレが優秀な師に師事すれば、良い魔導師になるだろう。

——あの性格が何とかなれば。

剣筋が馬鹿正直なもの、魔術が力押しなもの。外見に似合わず、かなり体育会系というか脳筋というか。

苦笑しつつ、新たに8つのシューターを作り出す。

言葉も無く、弾ける様に四方に飛び出した薄らと輝く球形のそれらは、然し何かに導かれるようにして、金髪ちゃんのフレイムアローを一つ残らず叩き落していく。

そのあまりの光景に、顔を真っ青にして一步後退る金髪ちゃん。けれども、どうやら金髪ちゃんは本物のようだ。

一步下がった自らの脚に気付くと、ギシリ拳を握り締め、地の底までも踏み抜かんとするような気迫をこめて二歩前へと踏み出した。

……ああ、いいなあ。視野狭窄で脳筋だけど、この娘にはガッツがある。

途端停止する炎の矢の雨。あわせるように此方もシューターを手元に引き寄せる。

と、金髪ちゃんは何をする心算なのか、自分の周囲に炎の矢をコレでもかと言うほどに設置し始めた。遅行型発動、というやつだろう。「行きますわっ！！」

そういつて、再びレイピアを眼前に構える金髪ちゃん。

それで、彼女の目的に大体察しがついた。

「はああああああああああっ！！！！！！」

特攻、と言つやつですわかります。

即座に彼女の周囲を覆うファイヤーアローをシューターで叩き落しながら、向い来る彼女に備えてバツクルを構える。

半自動制御であるファイヤーアローならではの、遅行型発動と近接攻撃を組み合わせた魔導師の戦い。

魔術の研鑽者たる魔術師ではなく、魔術の担い手たる魔導師の戦い。

「いい工夫だ」

思わず口元が緩む。基本的な運用だが、最近の魔術師といえば、魔力至上主義が行き過ぎて、どいつもこいつも発動速度と術の規模ばかりに目を取られている。

本当に大事なのは“運用”だ。それ無くして、本当の意味では魔術は使えない。そうして使われない魔術はゴミにもなれないのだ。

ああ、金髪ちゃん。キミに魔導を仕込めば、一体どの程度まで伸びるのか。

内心で若干そんなことを妄想しながら、けれども手管は常に正確に一つ一つ丁寧に潰していく8つのシューターを操りながら、同時に突き込まれたレイピアを片手剣で受け流す。

「なっ！？ そんな馬鹿な！！」

まあ、普通はありえないだろう。何せ、今の俺は8本の腕で魔術を操りながら、同時に剣と盾を使っているような物だ。

魔導師系スキル並列思考。同時に複数の思考を処理するスキルだ。魔術の発動速度を速める直列思考が重視されすぎて、この並列思考スキルは現在では大分廃れてしまっているらしい。

昔書庫で見つけた文献から再現してみたのだが、これが中々使えて重宝する。まあ、脳筋には向かないスキルだが。

「っはあああああ！！！」

それでも、諦めずに刺突を繰り返す金髪ちゃん。

その彼女に対して突き出す盾。視界を立てに覆われた金髪ちゃん。

その刺客から襲い来る此方の片手剣。

奇襲術の一つなのだが、一対一の対人戦ではかなり厄介な剣術だったりする。

反射的に飛び退る金髪ちゃん。その選択は、この剣術に対する選択としては妥当。……然し戦術としては失策だ。

即座に飛び掛るシューター。ソレを恐れて距離を詰めていたというのに、自ら距離を離してしまった金髪ちゃん。

咄嗟に魔力の盾で身を守るも、こっそりと忍び寄っていたシューターの一つが、直下から金髪ちゃんの顎を叩いた。

ガクンと揺れる金髪ちゃんの身体。一呼吸おいて、金髪ちゃんはガクリと膝から崩れ落ちた。その崩れ落ちる金髪ちゃんの表情が、何処か清々しそうに笑って見えたのは、気のせいだろうか。

次の瞬間沸き上がる歓声。

まあ、中々の手管だ。鍛えれば間違いなく一流に届くだろう。

此方としても、久々に楽しい戦いが出来たし、満足だ。

——然し、何か忘れているような？

崩れ落ちた金髪ちゃんを抱え上げ、医務室に向いながら、そんな違和感に首を傾げるのだった。

急

急

と言うわけで、金髪ちゃんが私に弟子入りした。わからん——こともない。

あの決闘の後、レビンと共に金髪ちゃんを医務室に連れて行き、彼女が目覚めるまで医務室で時間を潰していたのだ。

「——わたくしは、まけましたのね」

それが、金髪ちゃんの第一声。

とりあえずレビンに声を掛けさせ、次いで私が前に出る。

「やあ」

「——あなたですの」

黙って金髪ちゃんの前に立つ。一応レビンをその場から一時撤退させ、この会話は二人だけの物、と言うことにした。

「なんですの。敗者を笑いに——まあ、あなたはそういう人間でも無いでしょうが……」

言って自重する金髪ちゃん。そういうネガティブ思考は病人にはあまり良くないのだが。

まあ、だからといって、負けて落ち込むな、なんて酷な事はいえない。負けたら落ち込み、次ぎえの闘志とするのが一番いいのだから。

「報酬」

「ああ、それですの。それなら後から——」

「変更を要求する」

「はい？」

うん。だって、金貨十枚っていつでも、実は此方もお金持ちだ。そ

の程度の端金……と言つような額でもないが、ソレよりもっと面白そうな物を見つけたのだから。

「此方に師事しろ」

「——はあ？」

何を言っているのか分らない、と言つような表情の金髪ちゃん。

「金貨十枚分、一月」

「……それは、一月自分の訓練に付き合え、ということですよ？」

まあ、大体そんな感じだろう。首を縦に振って肯定する。

「——後半の戦術は、見事」

「えっ？」

「磨けば、無双」

少なくとも、魔物との前線国家にでも行かない限りは、金髪ちゃんを害するに至る物が無い、と言つ程度までにはなるだろう。

然しこのままでは駄目だ。慢心は神をも殺す。今のままでは剣魔共に中途半端なのだ。

そんなことを、簡単に金髪ちゃんに伝えたと、金髪ちゃんは少し嬉しそうに頬を染めて微笑んだ。

「それは——寧ろ此方からお願いしたい事ですが——あなたの技量は、私もじかに見せていただきましたので」

「——一ヶ月、レビンに会う暇も、無いかもしれないが」
「っ!？」

少し身を強張らせる金髪ちゃん。

「——まあ、その一月で、あのハーレムを上回らせて見せるが」

悩む金髪ちゃんの耳元で、そう小さく囁く。

途端にピクンと身体を跳ねさせる金髪ちゃん。

「それは——本当ですよ？」

「無論」

何せあの面子は、基本的に特化型の集まりだ。

見た限り、精霊魔術中心、加護持ちの剣士型、属性特化型など。

魔法剣士型のスタイルは扱いが難しいが、然しその分最終的なステ

ータスは他の大半を圧倒する。

故に。彼女は間違いなく伸びる。

そんなことを、再び簡単に彼女に告げる。

金髪ちゃんは少し悩んだように目を閉じると、小さく、けれども確かに頷いて見せた。

「——改めて自己紹介させていただきますわね」

と、金髪ちゃんが、それを切欠とするかのようにそんな事を言い出した。

そういえば、金髪ちゃんの本名しらねえ。

「私、フェルミ王国が公爵、ゴールドー公爵が第4子、シルヴィア・ヴァン・フウム・ゴールドーと申します。シルヴィア、と及びくださいな」

「……アイン・セラフ・フレシュテ・ド・ガレリア」

正式な名乗りをされた以上、此方も正式な名乗りを返さねばなるまい。コレ、万国の貴族の共通認識。

で、名乗った途端に金髪ちゃん——もとい、シルヴィアがあれっ？

という表情になった。

「ガレリア？」

「内緒で」

言う。どうも名前から関連した情報を思い出したらしく、一瞬シルヴィアの血の気が引いていた。が、まあ問題あるまい。

「……では、これからよろしく願いますわね」

少しして落ち着いた様子のシルヴィア。

そんな彼女と手を差し出しあって、握手をした。

「……因みに、ロイ様とあなたの関係は……」

「昔の師弟関係」

「……本当に？」

「それ以上を期待されても、どうしろと？」

如何でも良いが、金髪ちゃんなのにシルヴィア（銀）なのだなー、とか思ったり。

まあ、ゴールドイー（金）だけど。寧ろ脳金（筋）か。

で、気付けばいつの間にかシルヴィアと本格的に師弟関係を結んでいたりして。

「先生、行ってまいります！」
「ん」

乗りはどこぞのスポ根。シルヴィアが鮎川こずえなら、此方は安西先生なキャラだけど。

で、本日は久々にシルヴィアがレビンに顔を合わせに行く日だ。

少し前に現地実習が発表され、それにレビンが我々を誘いに来たのだ。

此方としてはシルヴィアとの契約期間の終わりだったので、丁度良しとシルヴィア一人を送り出した。

「師匠も着ませんか？」

などと洩られたが、残念ながら私にも用事がある。別口で狙いたい獲物がいたのだ。

で、その三日後。帰ってきたら、ロイハーレムの面々から詰め寄られた。

簡単に略すると、「私も弟子にしろ」と。

いや、それ人にモノを頼む態度じゃない、なんて言葉は誰にも聞き

入れられない。何せ全員有力者の娘。揃って敵に回せば国とも戦える。

もう色々面倒になって逃げ出したのだが、どうもシルヴィアが一月で優秀になりすぎたのが原因らしい。で、その理由をさらっと喋っちゃったのだとか。

ついでに、我がもう一人の弟子も、先生の弟子ならしょうがない、なんて馬鹿な助長をしたものだからもう。お前の言葉なら、お前のハーレムの面々は拡大解釈してしまうだろうに。

シルヴィアエ……。ついでにレビンエ……。

女の子に追い回されるのは……まあ、野郎に負いまわれるよりは眼にいい。

が、どうやら、静かな学園生活と言うのは、もうすでに此处で終わりがらしかった。

「ソレが青春だよ、青春！」

マロンエ……。

こうして、このことを切欠に、私はロイ・ハーレムの巻き起こすトラブルに巻き込まれる事になる。

それがたまに、世界を滅ぼしかねない大惨事だったり、逆に結果的に世界を救うなんて大事になったりもするのだが。

——この気は未だ、そんなことに成るなどとは露も思わず。

只管、離れていった平穏な日常を思っ、ほろりと小さく涙するのだった。

急（後書き）

以上で終わり。
皆様、良いお年を！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0295ba/>

【2011年】魔術師さんの学園生活なう【書き納め作品】

2011年12月31日21時53分発行